



かもめの ジョナサン

リチャード・バック
五木寛之訳

写真＝ラッセル・マンソン



かもめの ジョナサン

リチャード・バック
五木寛之訳

写真＝ラッセル・マンソン





JONATHAN LIVINGSTON SEAGULL

by Richard Bach

Original Copyright: Richard Bach

Photos, Copyright: Russell Munson

This book is published in Japan by arrangement with
Macmillan Co. through Charles E. Tuttle Co. Inc.,
Tokyo.

かもめのジョナサン

リチャード・バック 翻訳：五木寛之（いつきひろゆき）

写真：ラッセル・マンソン

発行 1974. 6. 20 9刷 1974. 8. 25

発行者 佐藤亮一

発行所 新潮社 〒162／東京都新宿区矢来町 71／振替東京 808

定価 600 円

印刷所 錦明印刷株式会社

製本所 新宿加藤製本株式会社

©1974 Hiroyuki Itsuki, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。



目 次

かもめのジョナサン…………… 3

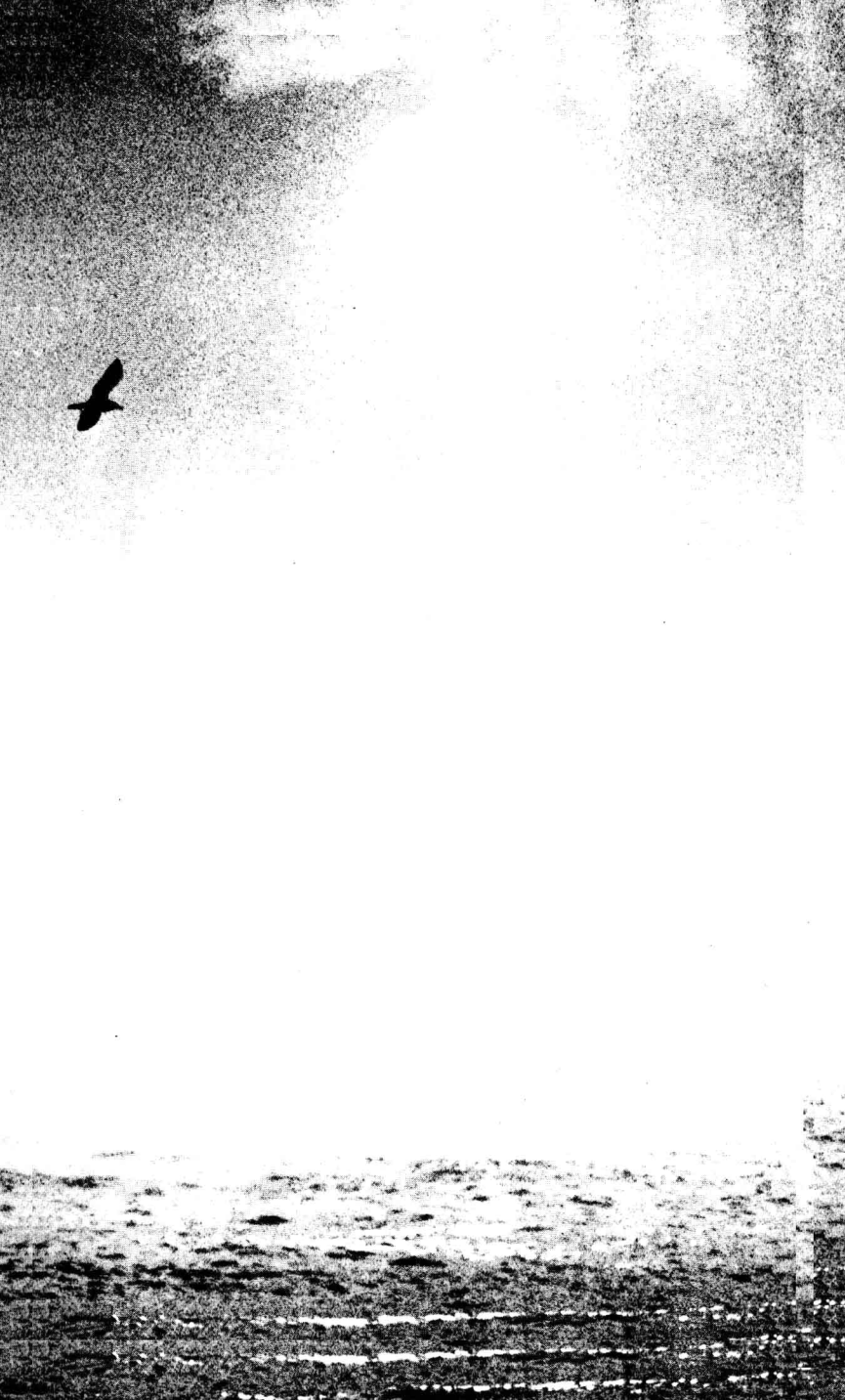
ひとつの謎として／五木寛之…………… 105

——『かもめのジョナサン』をめぐる感想——



Part One





朝だ。

しずかな海に、みずみずしい太陽の光が金色にきらめきわたった。

岸からやや離れた沖合では、一隻の漁船が魚を集めるための餌を海にまきはじめる。すると、それを横から失敬しようという〈朝食の集い〉の知らせが上空のカモメたちの間にすばやくひろがり、やがて押しよせてきた無数のカモメの群れが、飛びかいたがらわれがちに食物のきれはしをついばみだす。今日もまたこうして、生きるためのあわただしい一日がはじまるのだ。

だが、その騒ぎをよそに、カモメのジョナサン・リヴィングストンは、ただ一羽、船からも岸からも遠くはなれて、練習に夢中になっていた。

空中約三十メートルの高さで、彼は水かきのついた両脚を下におろす。そして、くちばしを持ちあげ、両方の翼をひねるようにぎゅっとねじ曲げた無理なつらい姿勢を、懸命に

たもとうとする。翼のカーヴがきつければきついほど低速で飛べるのだ。そして、いまや彼は、頬をなでる風の音が囁くように低くなり、脚もとで海面が静止したかに見えるぎりぎりのところまでスピードを殺してゆく。極度の集中力を発揮して目をほそめ、息を凝らし、強引に……あと……ほんの……数センチだけ……翼のカーヴを増そうとする。その瞬間、羽毛が逆立ち、彼は失速して墜落した。

言うまでもない事だが、ふつうカモメというやつは空中でよろめいたり、失速したりするものではない。飛行中に失速するなどということは、彼らにとって面目を失うことであるだけでなく、恥すべき行為ですらある。

ところがジョナサンは、恥ずかしげもなく飛びあがると、またもや翼を例の震えるほどのきついカーヴにたもち、ゆっくりと速度をおとしてゆくのだった。おそく、さらにおそく、なおもおそく——そして彼はふたたび失速し、海に落ちた。どう見てもこれは正気の沙汰ではない。

ほとんどのカモメは、飛ぶという行為をしごく簡単に考えていて、それ以上のことをあえて学ぼうなどとは思わないものである。つまり、どうやって岸から食物のあるところまでたどりつき、さらにまた岸へもどってくるか、それさえ判れば充分なのだ。すべてのカモメにとって、重要なのは飛ぶことではなく、食べることだった。だが、この風変りなカ

モメ、ジョナサン・リヴェンゲストーンにとって重要なのは、食べることよりも飛ぶことそれ自体だったのだ。その他のどんなことよりも、彼は飛ぶことが好きだった。

そんなふうな考え方をしていると、仲間たちに妙な目で見られかねないことは彼も承知していた。なにしろ実の両親でさえも、彼が毎日のようにひとりきりで朝から晩まで何百回となく低空滑空をこころみ、実験をくり返すのを見ては、おろおろしている始末だったから。

彼は実際、おかしな練習に熱中していた。たとえば、海面からの高さが自分の翼の長さの半分以下という超低空で飛んだりもするのだ。そうすると、なぜだか理由は判らないが高いところを飛ぶ時よりもかえって少い力で済み、滞空時間も長くなるのである。また、彼が滑空を終えて着水するときには、両親を海中に突っこみバシャンと水をはねあげる普通のやり方ではなく、両親を胴体にびったり流線型にくっつけたまま水面に接触するので、海面には長いきれいな航跡が残るのだった。そのうち、彼が脚をあげたままの恰好で浜辺に胴体着陸をおっぱじめたあげく、砂についた自分の滑りあとを歩測するような真似までやりだした時には、両親もさすがに呆れかえって、がっくりきたものだ。

「なぜなの、ジョン、一体どうして？」母親は息子にたずねた。

「なぜあんたは群れの皆さんと同じように振舞えないの？ 低空飛行なんて、そんなこと

ベリカンやアホウドリたちにまかせておいたらどう？ それに、どうして餌を食べないの？ あんたったら、まるで骨と羽根だけじゃないの」

「骨と羽根だけだつて平氣だよ、かあさん。ぼくは自分が空でやれる事はなにか、やれない事はなにかつてことを知りたいだけなんだ。ただそれだけのことさ」

「いいかね、ジョナサン」と、説いてきかすような口調で父親が言った。

「まもなく冬がやってくる。漁船も少くなるだろうし、浅いところにいる魚もだんだん深く潜つてゆくようになるだろう。もしお前がなにがなんでも研究せにやならんというんなら、それは食いのことや、それを手に入れるやり方だ。もちろん、お前のその、飛行術とかいうやつも大いに結構だとも。しかしだな、わかつとるだろうが、空中滑走は腹の足しにはならん。そうだろ、え？ わたしらが飛ぶのは、食うためだ。ひとつ、そこんところを忘れんようにな。いいか」

ジョナサンは素直にうなづいた。そしてそれからの数日、彼はほかのカモメたちと同じようにやってみようと頑張つた。実際、彼はやつてみたのだ、棧橋や漁船の周囲を、群れの仲間たちと金切り声をたてて争いながら飛び回り、ハンクズや魚の切れはしめがけて急降下したりしてやつてみた。しかし、彼にはやはり無理だった。

こんなことが一体なにになるというんだ、と考へて、彼はやつと手に入れた小イワシを

追いつがってくる腹へこの年寄りカモメにほいと落つことした。その気にさえなれば、こんなことをしている間に飛ぶことの研究がいくらでもできるんだ。おぼえなきやいかんことは、それこそ山のようにあるというのに！

ジョナサンはふたたび群れを離れた。そしてただ一羽、はるかな遠い沖合で、飢えながらもしあわせな気持で、練習を再開した。

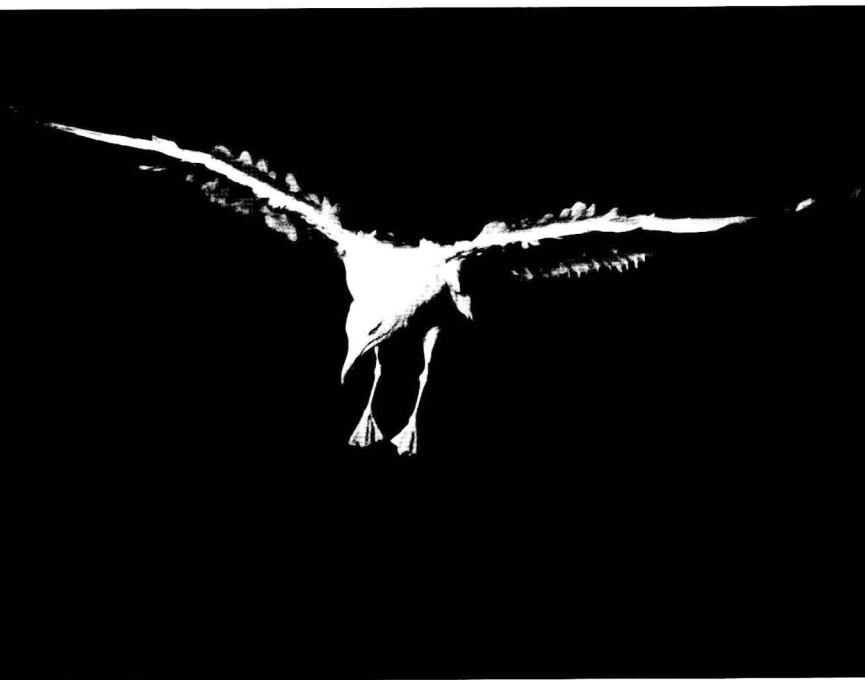
さしあたっての課題はスピードだった。だが一週間たらずの練習で、彼は世界でいちばん速いカモメよりもっと多くのことを、スピードに関して学び終えたのである。

彼は三百メートルの高さから、刀のかぎり激しく羽ばたきながら波間めがけて猛烈な急降下をやったのけた。そしてその結果、どうして普通のカモメが強烈な加速急降下をやらかさないかという理由を知った。それをやるとわずか六秒後には、なんと時速百十数キロに達してしまうのである。そのスピードでは、翼を上にもちあげたとたんに、たちまち安定が失われるのだ。

なんども同じ事態が発生した。細心の注意をはらっているにもかかわらず、能力ぎりぎりの限界をきわめようとするために、高速時においてコントロールが失われるのである。

まず、三百メートルまで上昇。それから最初に全力水平直進。ついで羽ばたきながらの垂直急降下に移行。するとかならず左の翼を上にあおったところで動かなくなり、激しく





左へ横転しようとする。そこで右の翼も上にもちあげ、たてなおしをはかる、と、稲妻のように一瞬はげしく右回りにきりもみ状態となって落下するのだ。彼はこれ以上慎重にできないうらい慎重に両の翼をおおてみた。だが十回ころみて、十回とも時速百十キロをこえたたん、回転する羽毛の塊となり、コントロールを失ってまっさかさまに水面に激突してしまうのである。

この問題をとく鍵は——と、彼はびしょ濡れになりながら考えた。重要な点は高速降下の最中に翼をじっと動かさずにいることだ。そうだ、時速八十キロまでは羽ばたいても、それ以上になったときは、翼をびたっと静止させてしまえばいい。

六百メートルの上空からふたたびやってみた。横転しながら降下にはいり、やがて時速八十キロを突破すると、彼はくちばしを真下に向け、翼をいっばいにひろげたまま固定した。これにはものすごい力が必要だったが、効果は満点だった。十秒もすると時速百四十キロ以上に達し、頭がぼうっとなってきた。まさにその瞬間、彼、ジョナサン・リヴェンガストンは、カモメの世界スピード記録を樹立していたのだ！

だがその勝利はつかの間のものだった。引き起こしにかかったその時、固定した両翼の角度を変えようとしたとたんに、彼は以前と同じあの危険な操縦不能の災難にまきこまれたのである。それは時速百四十四キロというスピードのまったなかで、ダイナマイトの

ような打撃を彼にあたえた。そしてジョナサンは破裂したようになり、煉瓦同然の固い海面に激しく突っこんでいったのだ。

彼が意識をとりもどしたのは、日没後、かなりたってからのことだった。彼は月の光をあびながら、海上をゆらゆらと漂っていた。両の翼はまるで鉛の板みたいな感じだったが、それよりも、背中にのしかかってくる敗北感の重圧のほうがさらに重かった。彼は打ちひしがれた心で、いっそのことその重さが自分を海の底まで優しく引きずりこみ、それで何もかも万事終りということにしてくれたらどんなにいいだろう、と考えた。

やがて彼は水の中にどっぷりつかったまま、うつろに響く不思議な声を自分の内部に聞いた。どうしようもないことだ。お前は一羽のカモメにすぎない。もともとお前にできることには限りがあるのだ。もしもお前が飛ぶことに関して普通以上のことを学ぶように定められていたとしたら、目をつぶってでも正確に飛べるはずだぞ。それにお前がもっと速く飛ぶように生れついていたのなら、あのハヤブサみたいな短い翼をもち、魚のかわりに鼠かなんか食って生きていたはずだ。お前の親父さんが正しかったのだ。馬鹿なことは忘れるがいい。群れの仲間のところへ飛んで帰って、あるがままの自分に満足しなくちゃならん。能力に限りのある哀れなカモメとしての自分にな。



